

# モノグラフ・高校生'94

vol. 40 親たちの学校期待



監修・静岡大学教授 深谷昌志

神奈川県立湘南高校教諭 穂坂明徳  
東京都立上野高校教諭 木下勉  
桜美林高校教諭 尾澤弘恒  
東京都立上野高校教諭 蒲生眞紗雄

## ●目次

はじめに	2
本報告書の要約	3
第Ⅰ章 調査の意図と調査対象の特性	6
1. 調査の意図	6
2. 調査の方法	7
3. 調査対象の特性	8
第Ⅱ章 家庭の教育と親の学校期待	13
1. 子育てのスタイル	14
2. 子育ての達成感	26
3. 子育てと学校期待	31
第Ⅲ章 親たちの教育観と学校期待	39
1. 通学校に対する認識	39
2. 卒業時の学校期待	43
3. 親たちの教育観	46
第Ⅳ章 学校の教育指導への期待	51
1. 子どもを伸ばす効果的方策	51
2. 親の期待する教育指導	57
3. 親子の入学希望度と学校満足度	63
第Ⅴ章 高校教師に対する期待度とその背景	67
1. 学校に対する現状認識	67
2. 教師への期待の中味	69
3. 望ましい担任像	77
4. 生徒指導に対する親の意識	81
おわりに	85
資料1 調査票見本	86
資料2 基礎集計表	101

\*おことわり 本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。

## ●はじめに

日頃、親として子どもが通っている学校や先生のことについて、何かを感じていたとしても、そういったことを“ホンネ”として語ることは少ない。まして、学校側が用意するPTA懇談会や父母面談の席では、親の立場から学校や教師のことについて、意見を直接ぶつけるようなことは、なかなか難しい。したがって、学校や教師の側でも、現在の教育指導のあり方や、家庭と学校の教育上の分担すべき範囲などをめぐっては、はっきりとした見通しがもちにくくなってきているのではないだろうか。

ところで、学校教育が高度に発達した状況を指して「高学歴社会」とよぶことがある。そうした社会では、「高卒」は当たり前、むしろ、どのような大学に入れるかということが重視される。親も子ども学校にける期待は子どもの頃から過大ともいえるくらいに大きなものになる。いうならば、教育の学校主義化である。それとともに早い段階から進学競争は激化し、学校教育は社会的地位達成の手段となる。本来、高校段階とは、子どもの成長・発達の過程において、能力・適性の分化が進み、将来の自己の進路選択を決定する大事な時期である。しかし、高校の階層序列化が進んだ現在、上層のいわゆる「進学校」は小学校からの累積された学校主義的意識の侵蝕と偏差値偏重の過熱した受験競争の波をまともに被っている。親の気持ちとしては、わが子に少しでも高い社会的地位が獲得できる将来を見越して、有名進学校の教育に期待をかけるのである。また、進学校に対する社会一般の評価もそのような見方になりがちである。

けれども進学校に入れたからといって、すべての生徒がそうした進学校なりの教育の恩恵に浴しているわけでもない。高学歴社会の中で、親から見たとき、進学校の教育のいっ

たい何を評価し、また何に期待しているのだろうか。教育への利害関心が高い親ほど、逆に学校や教師に対しての発言は慎重にならざるをえないともいわれる。そのことがまた急激に変化する社会の中で、学校や教師の側に当面する教育状況を見えにくくさせる結果となっているのであろう。

そこで以上のような問題関心から、今回の調査は地方の進学校に焦点を当てて、そうした進学校に子どもを通わせている親の側から見た学校に対する期待を探ってみた。首都圏の進学校と比較すれば、学校を取り巻く教育環境はまだまだ穏やかにも思えるが、一方ではそうした進学校においても、親のわが子に対する期待の“熱さ”には変わりがないのではないかとも思われる。アンケートという調査方法によって、どこまで“ホンネ”が聞き出し得るか、その制約はあるが、首都圏の進学校に勤務するレポート執筆者の日頃の実感も多少込めながら、考察を進めてみた。

お忙しい中、煩わしくデリケートな質問にも率直にお答えいただいた多くの父母の方々にも厚く感謝をしたい。また高校教師が中心となって企画・実施した今回の調査に対し、終始ご指導とご助言をいただいた深谷昌志静岡大学教授、武内清上智大学教授をはじめ、研究会同人の方々にも深謝したい。

【付記／本報告書は日本教育社会学会第45回大会（1993年10月＝日本女子大学）において発表した内容をベースに、その後さらに新たな分析項目を加え、再分析したものである】

### 本書の執筆分担

穂坂 明德	I章、II章
木下 勉	III章
尾澤 弘恒	IV章
蒲生眞紗雄	V章

## 本報告書の要約



### 第Ⅰ章 調査の意図と調査対象の特性

- ① 本調査は、地方の進学校の親の学校期待を明らかにしようとしたものである。調査は、高校生像、通学校の学校・教師・生徒観、授業・生徒指導への要求、高校教育・子育て感、PTA役員経験などをたずねた。これらを通して、親の学校期待の実態と、その階層的なあらわれ方の特質を明らかにする。
- ② 調査対象は1道6県（長崎、福岡、兵庫、石川、静岡、茨城、北海道）の計8校の公立進学校で、高校2年生の父母2,436名である。調査方法は学校通しの質問紙調査で、1993年6月～7月に実施。回答数1,328名（父親16.5%、母親81.9%、その他1.6%）で、回収率は54.5%。
- ③ 対象校は伝統校が多く、国公立大学への進学実績がある。父母の学歴は、高卒が多く、回答者の父親の5割、母親の6割を占める。専業主婦層の母親に高学歴がみられる（p.10 表Ⅰ-3の2）。生徒の進路希

望は、難関大学14.9%、普通の4年制大学68.1%（p.11 表Ⅰ-6）。親子の入学希望度は8割を超え、現在の学校満足度も7割以上に達し、極めて高い（p.12 図Ⅰ-2・3）。

### 第Ⅱ章 家庭の教育と親の学校期待

- ① 一般の高校生像と比較すると、生徒はおとなしく、まじめな優等生タイプが多い。家庭における親子関係も比較的円満で、親密である。この傾向は高学歴層に著しく、しつけや勉強・成績面でもうるさい。子どもに対し、自立型の親6割、庇護型の親4割である。家庭教育面では、自立型は「本人任せ」（34.4%）が多く、「父」「母」「父母の話し合い」タイプでは、総じて庇護型が多い。庇護型の親ほど厳しい指導型になっている（p.23 図Ⅱ-5・6、p.25 表Ⅱ-6）。
- ② 子育てをうまくいっていると評価する親は6割以上。成績のよい子の親ほど好評価（p.26 表Ⅱ-7・8）。40代後半で、高卒・自営業層の父母は子育てに満足感が強い。

一方、知的発達面では高学歴になるほど評価が厳しくなり、公務員層の父親、パートタイム・専業主婦層の母親にこの傾向が強い（p. 30 表Ⅱ-10）。

- ③ 成績最上位層は難関大学を希望し、学校関係や公務員層の父親、専業主婦層の母親をもつ高学歴家庭に多い。学校満足度も高く、学校教育に対し、受験指導のみならず体力、精神力をきたえることを求める余裕がみられる（p. 31 表Ⅱ-11・12・13）。

一方、成績下位層ほど塾や予備校への依存率も高く、学校満足度の低い家庭である（p. 35 表Ⅱ-15）。

同じ進学校の親でも、学校に対するわが子の教育期待には、「学力」「個性」「社会性」などの強化・育成をめぐる、学校期待の分化がみられる。

### 第三章 親たちの教育観と学校期待

- ① 通学校に対する認識では、子どもに直接関係することには90%を超す認識率。定期テストの回数など、教育内容に関する認識は60%であるが、学校の伝統や校歌に関する認識率はきわめて低い（p. 40 図Ⅲ-1）。
- ② 卒業時に何が達成できるかについては、「心の許し合える友だちが見つかる」が70.2%、「希望の大学に進める学力がつく」は39.6%。一方、「1人でも見知らぬ外国旅行ができる」「パソコンなどの実用的技術が身につく」は、60%以上ができないとする（p. 43 図Ⅲ-3）。
- ③ 親たちの教育観では、「高校生になれば何でも1人でできるようにやらせたい」62.4%、「社会に出たときものをいうのは本人のやる気」71.8%、「高校で身につけさせたいものは人生に必要な基本的知識や技

能」85.6%、「高校に入学したならどんな子でも卒業まで面倒をみてもらいたい」72.2%（p. 46 図Ⅲ-5）。

### 第四章 学校の教育指導への期待

- ① 子どもを伸ばす効果的方策では、「専門家による職業相談」(76.2%)、「進路別学級の編成」(74.0%)、「専門家を招いた授業」(54.7%)などが高い割合である（p. 52 図Ⅳ-1）。高学歴の親は、学校に自由でのびのびした個性を伸ばす教育を期待している。「能力別学級編成」は成績上位層の親が期待し、成績下位層の親は「予備校」に期待する（p. 53 表Ⅳ-1・3）。
- ② 学校の教育指導に関する16項目の中では、「夏休みの講習」(70.2%)、「通知表の所見記入」(68.8%)、「試験結果の学年順位」(67.1%)、「放課後の補習」(51.5%)、「家庭連絡物の発行」(50.3%)などが過半数を超えた割合である（p. 58 図Ⅳ-2）。高卒の父母に目立つのは、学力強化につながる要望であり、大卒層は豊かな教育環境づくりの希望である。全体に、成績下位層、学校不満足層の親ほど要望項目も多く、また希望も強い（p. 59 表Ⅳ-5・7・8）。
- ③ 親子の入学希望度と現在の学校満足度の開きは、中卒層の母親に大きい。職業別では、学校関係、公務員層の父親、またフルタイム層の母親が大きい。そして成績別では、下位層に大きな落差がみられた（p. 64 図Ⅳ-3・4・5）。

### 第五章 高校教師に対する期待度とその背景

- ① 子どもが通っている学校については、まじめな生徒が多く（86.7%）、学校は受験指導に熱心であり（84.4%）、地域の人か

らの評判もよい(80.5%)。しかし、教える力のある先生は、それほど多いとはいえない(42.7%)という現状認識をもっている(p.68表V-1)。

- ② 高校教師の資質としては、わかりやすい授業ができて(82.5%)、真正面から生徒に取り組む情熱があり(73.5%)、かつ生徒が気軽に雑談できる(67.0%)ような気さくな人柄を求めている(p.70図V-1)。
- ③ 高校の教育では、第一に基礎学力の充実(90.3%)を望んでいる(p.71図V-2)。次いで、父親は社会性(83.8%)や個性の伸長(81.4%)を重視している。一方、母親は大学入試のための勉強(81.9%)を強く望んでいる(p.72図V-3)。
- ④ 授業では、教科書の内容をきちんと教えてほしい(85.4%)と望んでいる。授業の中味は、受験に役立つもの(74.0%)を望んでいる。授業方法は、ゆとりをもって学べる工夫をしてほしい(67.5%)と考えている(p.75図V-4)。受験に役立つ授業は、母親(76.8%)の希望が強く、高学歴層の希望は中卒・高卒に比べて低い(p.76表V-4)。
- ⑤ 望ましい担任像としては、的確な進学指導能力(「現役で志望校に合格できるようにハッパをかけてほしい」77.3%、「子どもが受かりそうな受験校をはっきり教えてほしい」76.4%)とカウンセラー的役割(72.5%)を求めている(p.78表V-5)。中学時の担任ほど親との親密度は求めている(中学の担任51.2%に対して37.0%)(p.79図V-5)。カウンセラー的役割を第1位に望んでいるのは、高学歴層に多い(p.80表V-6)。

- ⑥ 生徒指導に対する学校側の措置について親たちは、かなり厳しい指導を容認している(p.82表V-7)。ただし、学歴など属性別による差が認められる(p.83表V-8・9)。

#### 〔結び〕

- ① 進学校でも、親の学校期待は受験教育一辺倒ではなく、学校期待の分化がみられる。
- ② 成績上位層の親ほど、受験のための指導だけでなく、ゆとりをもったのびのびとした社会性を育てるような教育を求めている。
- ③ 受験戦略を体得していない高卒以下の親の家庭には、結果的に進学校の教育指導が不利に働く場合が出てくる。
- ④ 多様な生徒の進路希望に即した、きめの細かい受験指導が、進学校においても必要である。それと同時に、高校生の「自立性」や「社会性」を育てる本来的な教育が望まれる。

#### 〔調査概要〕

時期●1993年6月～7月

方法●学校通しの質問紙調査

対象●全国1道6県(長崎、福岡、兵庫、石川、静岡、茨城の各1校、北海道2校)の8つの公立高校2年生の父母2,436名。回答数1,328名=父親16.5%・母親81.9%・その他1.6%(回収率54.5%)。

## 第 I 章 調査の意図と調査対象の特性



### 1. 調査の意図

現在、高校は進学率が93～94%台に定着して準義務教育化している。大学への進学率も37～38%台に達し、高校生のほぼ3分の1は高等教育へ進学していることになる。高校教育に対して、上級学校への進学準備のための教育を期待する要請はますます強くなっているといえよう。しかし、高校が大学進学のための準備教育機関化することの弊害を指摘する声も大きい。そうした声を反映して中教審答申においても、「第2章 高等学校の現状と問題点」の中で、改めて受験競争の激化をとりあげ、次のように述べている。「わが国の受験競争が特に問題にされるのは、競争に多くの人々が巻き込まれていて、受験勉強に

神経をすり減らし、心身の健康を損なうためである。また、自己を確立すべき中等教育の段階において、青年期に望ましい経験をしたり、精神的に豊かな生活を行うことが困難となっている状況は、その後の人間形成に悪影響を及ぼすことが懸念される」（文部省『新しい時代に対応する教育の諸制度の改革—第14期中央教育審議会答申—』平成3年5月発行）。高校において望まれる人間形成の社会化機能が、過度に進学準備教育へと傾斜することによって、機能障害に陥っていることの指摘である。今や高校は、学校格差間の程度の差はあれ、「高学歴取得」のための選抜・配分機関として機能する側面のほうがまさって

いる。

こうした状況の中で、高校の階層序列の上層にある進学校は、地域エリートの生徒を囲い込み、高い社会的地位の達成が見込めるような有名大学への合格最短コースに位置づけられる。むろん生徒も親も、そのような安全保障を進学校の教育に期待する。しかし、今日の進学校の事情は、その様相をかなり異にしてきている。同じ進学校といっても、公立進学校よりは私立進学校のほうが、特に中高一貫の私立進学校や大学附属の進学校のほうが、進学実績において優位に立っている。さらに現在の高校生にとっては、「1浪」は“ヒトナミ”と読んで当然視さえする風潮の中で、逆に塾や予備校などの学校外教育機関ばかりが隆盛をきわめている。もはや公立進学校は親や生徒が期待するほどの進学準備のための受け皿としても、十分に機能していないのではなかろうか。

しかも、公立進学校の内部においても、当然のことながら教育競争の原理は働いている。進学校への入学のスタートは一緒でも、生徒の能力や特性、親の教育観や社会背景的要因

などによって、進学校なりに提供される教育が有利に働く層とそれを生かすきれない層が生み出されてくる。見方を変えれば、親や生徒が欲する大学への受験戦略の中に進学校は取り込まれていて、効率的かつ有効な戦略拠点として機能する限りにおいて、彼らにとっての進学校の教育は十分な意義を見いだすことになる。

このような観点から、今回の調査は、地域のトップに位置するような、こうした公立進学校の親を対象に実施した。子どもを進学校に通わせながら感じている、親と学校との関係のあり方、学校や教師の教育指導の評価と親の意識のずれ、さらに高学歴取得を見越した親の学校に対するアカデミックな教育達成の期待度とその階層的なあらわれ方などについてみている。

対象を地方における地域の有名公立進学校にしぼったのは、首都圏ほど進学校の数が拡散的状況ではなく、しかも親の教育意識が、地域の進学校を支えている階層的要因をより強く反映したものになっているのではないかと考えられたからである。

## 2. 調査の方法

調査の対象は、極端な地域的偏りを避けるために、全国1道6県（長崎、福岡、兵庫、石川、静岡、茨城の各1校、北海道2校）に渡る8つの公立高校2年生の父母2,436名である。対象校は、各地域の学区レベルでトップないしそれに準じた進学校であり、アカデミックな教育達成を社会的にも強く要請されている公立普通高校である。

調査方法は、学校通しの質問紙調査とし、

自宅で父母のいずれかに記入してもらい、厳封の上回収した。調査時期は、1993年6月～7月で、1,328名（父親16.5%、母親81.9%、その他1.6%、回収率54.5%）の回答を得た。

調査項目は、生徒・両親の属性項目、現在の高校生像、通学校に関する項目、通学校の生徒および担任に関する項目、授業・生徒指導項目、高校教育・家庭・子育て感、PTA役員経験などである。

### 3. 調査対象の特性

調査対象校を進学校として特徴づけている点を、表Ⅰ-1に示した。4年制大学合格者数は現役・浪人を含めた数字で、入手できる範囲でまとめたものであるが、各校とも国公立大学合格者を相当数出している。また8校中6校が、日常的に課外補習を行っており、夏冬等の長期休業中の講習は、全対象校で実施されている。学校の創立も、明治、大正期にさかのぼる伝統校が多く、地域の名門校として安定した評価を受けている。

回答者の8割は母親であったが、2割を占めた父親は面倒なアンケートにあえて回答を寄せた教育関心の高い層ではないかと思われる。回答者の年齢層を表Ⅰ-2に示したが、高校2年生を子にもつ親の世代として、やはり40代が8割を占めている。

次に、回答者を含めた父母の職業・学歴構成を表Ⅰ-3の1にまとめてある。割合の多い順に、父親は①会社員、②自営業、③公務員（学校以外）となっている。また、母親はフルタイムの仕事についている者が約3割、パートタイムと合わせると約6割が家事以外の仕事で家の外に出る機会をもっている。専業主婦層は、回答者の母親の23.5%である。学歴をみると、父母ともに高卒が多く、父親で約5割、母親では約6割である。また、大卒の親は、父親で約3割、母親になると8.0%と少数になる。この数値は、首都圏の進学校の学歴構成とかなりの差異が出ているようである。

表Ⅰ-3の2は、親の職業と学歴の相関をみたものである。自営業層の父親には中卒が

表Ⅰ-1 調査対象校の学校概要

学校・地域	学校規模			4年制大学合格者数		課外補習	夏冬講習
	学級数	生徒合計※	教員数	国公立	私立		
A 長崎	32	1379	68	388	220	有	有
B 福岡	33	1489	80	156	418	早朝	有
C 兵庫	29	1205	73	259	422	無	有
D 石川	20	834	68	140	373	無	有
E 静岡	22	993	53	72		全学年	有
F 茨城	24	1022	60	17	26	有	有
G 北海道	27	1134	57	231		有	有
H 北海道	27	1113	54	184		有	有

※ 生徒数は、普通科だけでなく家政科、音楽科等の人数も含んでいます。



多く、公務員層は短大・専門学校卒が比較的多い。一方、母親では、フルタイム層は中卒者で39.3%、大卒者で37.3%とほぼ両極分化の傾向を示している。逆に専業主婦層は、大卒33.3%>短大・専門学校卒30.1%>高卒20.6%>中卒13.1%というように、高学歴に比例する形で増加している。

表Ⅰ-4および表Ⅰ-5は、子どもの人数と生徒の統柄を示した。子どもの人数が2人の家庭が57.2%、3人が32.2%、また調査対象校に通っている子どもに関しては、長男が30.6%、長女が41.0%である。

そうした生徒の進路希望とクラス内の学業成績をみたものが、表Ⅰ-6および図Ⅰ-1である。いずれも親を通しての回答であるが高校2年生の段階では自分の将来の進路に関してまだ不確定要素の高い時期であることを割り引いても、普通の4年制大学を希望する者68.1%、さらに難関大学進学を目指す者

14.9%となっている。全体の8割以上が4年制大学進学を希望しており、改めて調査対象校が進学校であることを明らかにしている。またクラス内の学業成績については、図示したように上位層18.0%、中の上層25.1%、そして下位層10.0%というような分布状況である。

親と子（親から見た）の入学希望度と現在の学校満足度を、図Ⅰ-2と図Ⅰ-3に示した。入学希望度は親子とも高く、ほぼ半数近くの親子は「ぜひ入りたかった」と思っており、「まあ入りたかった」と思った層と合わせると、8割以上が入学を望んだ高校である。さらに入学後の現在においても、学校への満足度は、「とても」と「かなり」満足を加えた数値でみると、親73.8%、子78.9%と高く入学後もそのまま高い割合で学校満足度が維持されていることが明らかになっている。いうならば、調査対象の4分の3は、親子ともども学校への満足感を示していることになる。

表Ⅰ-2 回答者の年齢

(%)						
31~35歳	36~40歳	41~45歳	46~50歳	51~55歳	56~60歳	61歳~
0.1	10.8	61.3	21.7	5.4	0.5	0.2

表 I - 3 の 1 父母の職業・学歴

(%)

父 親				母 親			
職 業		学 歴		仕 事		学 歴	
自営業	19.8	中学校	10.2	フルタイム	28.8	中学校	6.7
公務員(学校以外)	12.8	高等学校	48.6	パートタイム	29.8	高等学校	60.8
会社員	53.7	短大・専門学校	7.1	専業主婦	23.5	短大・専門学校	23.3
医師・弁護士	1.6	大学	32.3	自営業	12.1	大学	8.0
農・林・漁業	1.4	大学院	1.5	家業手伝い	2.8	大学院	0.2
学校関係	6.4	その他	0.3	その他	3.0	その他	1.0
その他	4.3						

表 I - 3 の 2 父母の職業 × 学歴

(%)

	父親の職業				母親の仕事			
	自営業	公務員	会社員	学校関係	フルタイム	パートタイム	専業主婦	自営業
中学卒	31.2	3.2	52.0	—	39.3	26.2	13.1	13.1
高校卒	20.9	13.0	60.5	0.7	25.9	37.3	20.6	11.2
短大・専門学校卒	20.5	21.6	50.0	3.4	29.1	18.6	30.1	15.2
大学卒	14.9	13.3	45.6	16.7	37.3	15.7	33.3	9.8

表 I - 4 子どもの人数

(%)

1人	2人	3人	4人	5人以上
7.5	57.2	32.2	2.6	0.5

表 I - 5 生徒の続柄

	(%)
長男	30.6
長女	41.0
二男・三男	11.0
二女・三女	17.0
その他	0.4

表 I - 6 生徒の進路希望

	(%)
難関大学	14.9
普通の4年制大学	68.1
短大	8.3
専門学校・各種学校	4.1
就職	1.0
その他・未定	3.6

図 I - 1 生徒のクラス内の学業成績

上位	中の上	中位	中の下	下位
18.0	25.1	30.8	16.1	10.0

図 I - 2 入学希望度

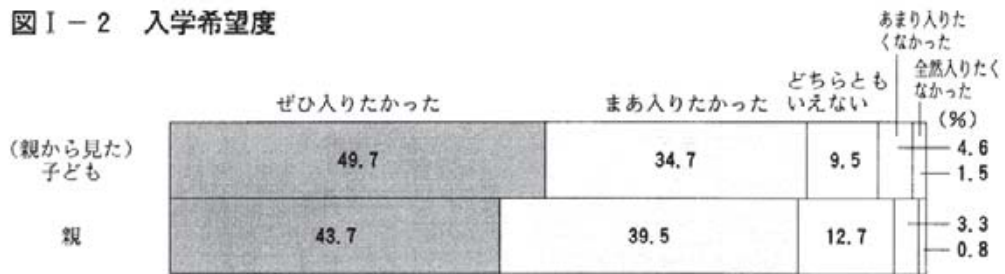
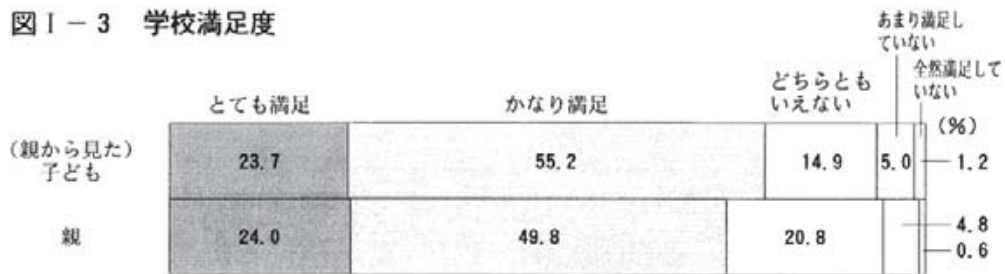


図 I - 3 学校満足度



## 第Ⅱ章 家庭の教育と親の学校期待



現在、家庭の教育力の低下が指摘され、それを補う形で学校教育の拡大がいわれる。青年期にある高校生にとっても、学校はますます大きな比重を占めてきている。改めていうまでもないが、青年期は自己自身の内面を形成し、自己の将来に向けて主体的に進路選択を図る時期である。高校教育はまさしくそうした自己確立を助長する課題を担っている。大学進学のためのただひたすら勉強し、この目的にのみ自己を収斂させてしまうことは、高校生の自立的な生き方を阻害することになる。青年期は、これまで育まれてきた親との葛藤や離反を経験し、また親-子の期待と失

望を踏み台に、一個の独立した人格へと脱皮を図るのである。

しかし、核家族化が進行し、少子化が一般的なすう勢にあつて、家庭や親が子どもを包囲する力は、ますます大きくなっている。今回調査対象となった親たちの子どもの数もまたその傾向を示していた。その一方で、学校教育に対し家庭の依存がさらに大きくなるとしたら、学校期待の中にそうした子どもにかけてきた親の子育てに対する期待がより強く投影されることになろう。

まず、地方の有名進学校に通う高校生の家庭の姿を通して、その点をもてみたいと思う。

# 1. 子育てのスタイル

はじめに、日常生活の中で捉えられる子どもの姿を追ってみたい。

## (1) 子どものイメージ

親は一般の高校生と比べてみて、わが子をどのようなイメージで描いているのであろうか。表Ⅱ-1は、現在の高校生に備わっていると思われる資質をたずねた結果である。「流行のセンス」に対して親は、とびぬけて高い評価を与えている。「大いにある」30.2%、「まあある」50.3%の割合であり、8割

の親が「流行のセンス」を現在の高校生にみられる特性とみている。次いで、「金銭感覚」や「行動力」をあげる親が多い。それに比べると、「たくましさ」「根気」「創造力」「知識の広さ」などについての評価は低い。一方、わが子に対するイメージをたずねた結果が表Ⅱ-2である。「とても」と「まあ」そう思うを合わせてみると、全体的には、①心やさしく(75.3%)、②品行方正で(73.0%)、しかも③先生に素直で(67.8%)、④将来の希望(64.7%)をもっている、どちらかとい

表Ⅱ-1 高校生像

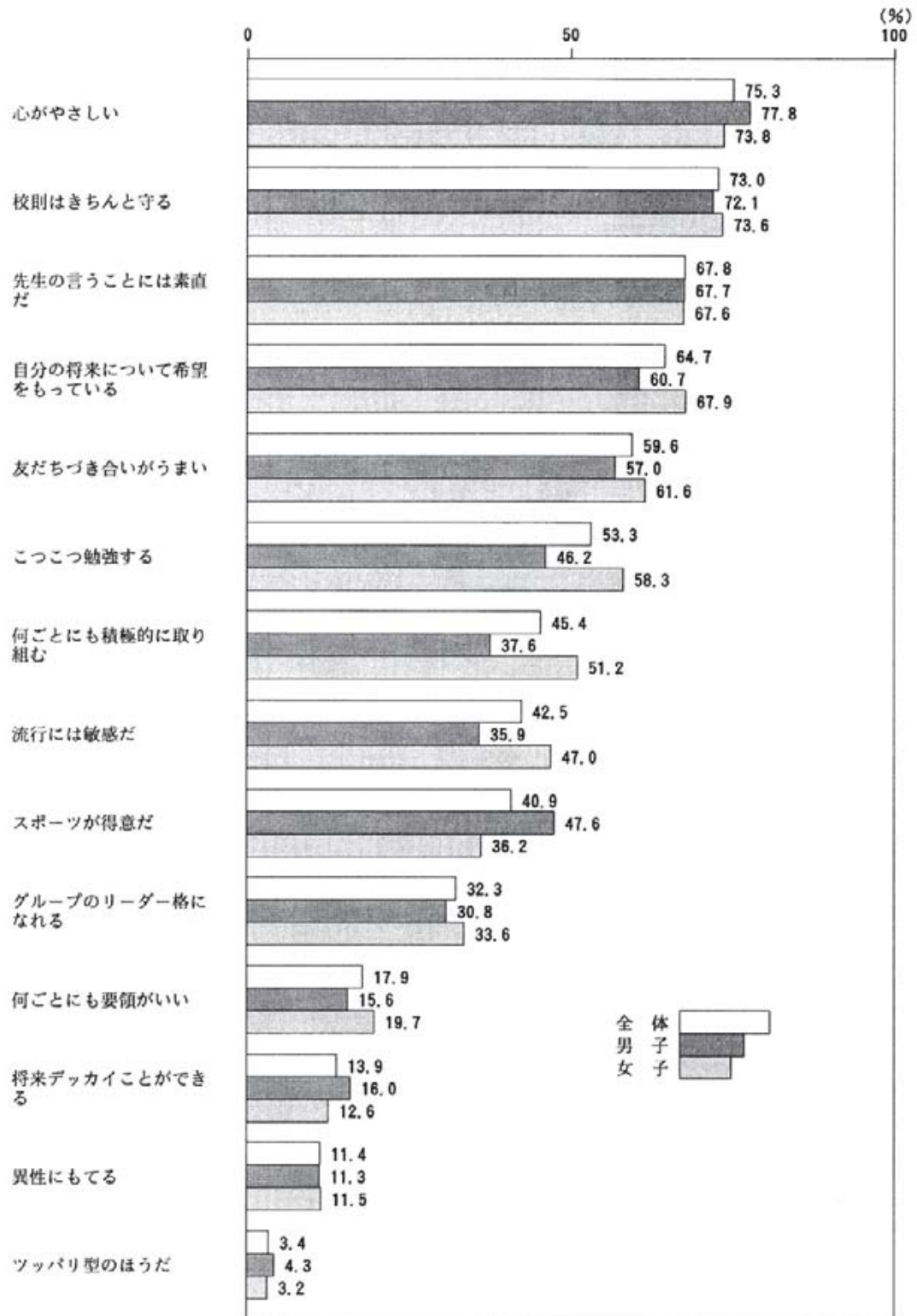
	(%)				
	大いにある	まあある	どちらともいえない	あまりない	全然ない
流行のセンス	30.2	50.3	13.8	4.9	0.8
	80.5			5.7	
金銭の感覚	8.6	35.4	24.9	28.5	2.6
	44.0			31.1	
自分で考え実行する力	6.7	35.7	31.0	25.4	1.2
	42.4			26.6	
他人を思いやる心	3.3	36.0	27.3	31.1	2.3
	39.3			33.4	
国際感覚	4.0	33.9	39.1	19.4	3.6
	37.9			23.0	
たくましさ	3.3	26.9	29.0	38.9	1.9
	30.2			40.8	
根気強くやり通す力	5.2	24.8	33.7	33.2	3.1
	30.0			36.3	
新しいことを生み出す力	3.8	24.7	39.7	29.1	2.7
	28.5			31.8	
幅広い知識	3.1	23.4	40.3	29.9	3.3
	26.5			33.2	

表Ⅱ-2 わが子のイメージ

(%)

	とても そう思う	まあ そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全然そう 思わない
心がやさしい	24.0	51.3	19.5	4.4	0.8
	75.3			5.2	
校則はきちんと守る	21.2	51.8	20.1	6.3	0.6
	73.0			6.9	
先生の言うことには素直だ	15.4	52.4	27.0	4.7	0.5
	67.8			5.2	
自分の将来について希望をもっている	19.8	44.9	25.3	8.5	1.5
	64.7			10.0	
友だちづき合いがうまい	11.3	48.3	30.2	8.7	1.5
	59.6			10.2	
こつこつ勉強する	12.2	41.1	21.5	19.2	6.0
	53.3			25.2	
何ごとにも積極的に取り組む	8.0	37.4	35.1	18.1	1.4
	45.4			19.5	
流行には敏感だ	9.3	33.2	37.0	16.1	4.4
	42.5			20.5	
スポーツが得意だ	12.3	28.6	28.6	22.9	7.6
	40.9			30.5	
グループのリーダー格になれる	5.8	26.5	37.2	25.2	5.3
	32.3			30.5	
何ごとにも要領がいい	3.4	14.5	40.3	32.1	9.7
	17.9			41.8	
将来デッカイことができる	3.4	10.5	52.0	27.3	6.8
	13.9			34.1	
異性にもてる	1.2	10.2	44.5	29.6	14.5
	11.4			44.1	
ツッパリ型のほうだ	0.3	3.1	12.7	32.6	51.3
	3.4			83.9	

図Ⅱ-1 わが子のイメージ（男女別）



(「とても」+「まあ」そう思う割合)



うと優等生タイプのイメージである。その反面、現代高校生像のトップにあげられた流行感覚や、スポーツマン、リーダー性などの行動力はあまりもち合わせていないようである。

さらにそれを、子どもの性別でみたものが図Ⅱ-1である。男子のほうに顕著にみられるのは、「心のやさしさ」（男子77.8%>女子73.8%）と「スポーツが得意」（以下同様に47.6%>36.2%）の2つの面である。一方、女子のほうでは、「将来の希望」（女子67.9%>男子60.7%）、「こつこつ勉強」（58.3%>46.2%）、「積極性」（51.2%>37.6%）、「流行感覚」（47.0%>35.9%）、「リーダー性」（33.6%>30.8%）などの面において親の評価は男子より高い。どうやら進学校では女子

高校生のほうが活発な様子うかがえる。

## (2) 親子関係のスタイル

では、こうした子どものイメージを下敷きにして、親は家庭の中でこれまで、子どもとどのようなかかわり方をみせてきたのであろうか。表Ⅱ-3は、家庭における親子関係をたずねた結果である。全体としては、9割近い親が子どもとの円満な関係を築いている。さらに、子どもは品行方正（66.3%）で、親も子どもの友人関係は熟知（61.8%）し、子どもと学校のことをよく話題に（61.5%）している。そして経済的にも何不自由なく（58.0%）、育ててきている。こうした面をみると、子育ての中で実にスムーズな親子関係が形成

表Ⅱ-3 家庭生活の評価

	とても そう思う	まあ そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全然そう 思わない
子どもとの関係はうまく いっている	20.9	65.9	10.6	2.1	0.5
	86.8			2.6	
子どもは規則正しい生活 をしている	9.8	56.5	18.7	13.3	1.7
	66.3			15.0	
子どもの友人関係はよく 知っている	11.4	50.4	27.9	8.6	1.7
	61.8			10.3	
子どもと学校のことをよく 話す	11.9	49.6	26.3	10.2	2.0
	61.5			12.2	
子どもには経済的に不自由 はさせなかった	10.5	47.5	30.2	10.3	1.5
	58.0			11.8	
子どもの卒業後の進路は 親子で食い違わない	10.6	45.1	35.4	7.5	1.4
	55.7			8.9	
子どもには何でも自主的に やらせてきた	8.4	46.4	35.0	10.0	0.2
	54.8			10.2	
子どものしつけは厳しく してきた	8.9	36.5	34.9	16.9	2.8
	45.4			19.7	
子どもの勉強や成績には うるさいほうだ	4.2	32.2	34.5	23.8	5.3
	36.4			29.1	

されてきたことがわかる。

そうした親子関係の特質を、子どもや親のもつ属性要因から、さらにみてみよう。

表Ⅱ-4は、学業成績ならびに親の学校満足度とのクロスである。学業成績からみると成績が下位から上位に上昇するにしたがって親は子どもに対し経済的に不自由な思いをさせずに(上位64.1%>下位53.8%)、子どもも品行方正(79.6%>49.6%)で、しかも親子で進路に関しては一致した見方(67.9%>41.1%)をとっていることが、はっきりとあらわれている。また現在、学校に対しより満足している親ほど、家庭生活においてもこうした子どもとのかかわり方を強く肯定する傾

向をみせている。

図Ⅱ-2は、子どもの続柄から家庭生活の評価をみたものだが、男子には品行方正ぶりが、女子には「親との間柄」「友人関係の熟知」「学校の話題」などの項目から、親との関係の親密さが特徴づけられる。さらにまた長男、長女に対して親は、しつけや勉強面で干渉的な姿勢を強くとってきたが、下の子どもに対しては、比較的自主性を認めた育て方をしてきているようである。

それでは、家庭におけるこうした親子関係のスタイルは、進学校に子どもを通わせている親に付与された社会的特質から出てくるものなのであろうか。表Ⅱ-5は、同様の項目

表Ⅱ-4 家庭生活の評価 × 成績・親の学校満足度

(%)

	学 業 成 績					親の学校満足度				
	上位	中の上	中位	中の下	下位	とても満足	かなり満足	どちらともいえない	あまり満足していない	全然満足していない
子どもとの間柄はうまくいっている	88.3	90.5	87.9	87.0	71.4	36.8	15.8	15.7	15.9	25.0
子どもは規則正しい生活をしている	79.6	69.2	64.3	62.1	49.6	17.3	7.8	6.7	6.3	12.5
子どもの友人関係はよく知っている	63.5	65.0	64.6	56.2	54.2	23.0	7.8	7.9	4.8	25.0
子どもと学校のことをよく話す	63.3	66.7	62.4	55.8	53.5	21.7	8.2	9.7	9.5	12.5
子どもには経済的に不自由はさせなかった	64.1	57.6	58.2	54.3	53.8	18.6	8.2	7.1	7.9	12.5
子どもの卒業後の進路は親子で食い違わない	67.9	60.9	53.3	49.3	41.1	21.7	7.3	5.9	9.5	0.0
子どもには何でも自主的にやらせてきた	58.1	53.6	58.1	52.6	44.6	17.5	5.7	3.7	7.9	25.0
子どものしつけは厳しくしてきた	47.9	47.3	42.6	46.9	39.6	15.5	6.0	6.0	19.0	0.0
子どもの勉強や成績にはうるさいほうだ	32.2	41.0	33.9	37.5	34.9	6.5	2.6	4.9	6.3	12.5

(「とても」+「まあ」そう思う割合)  
○ は最大値  
● は注目すべき準最大値

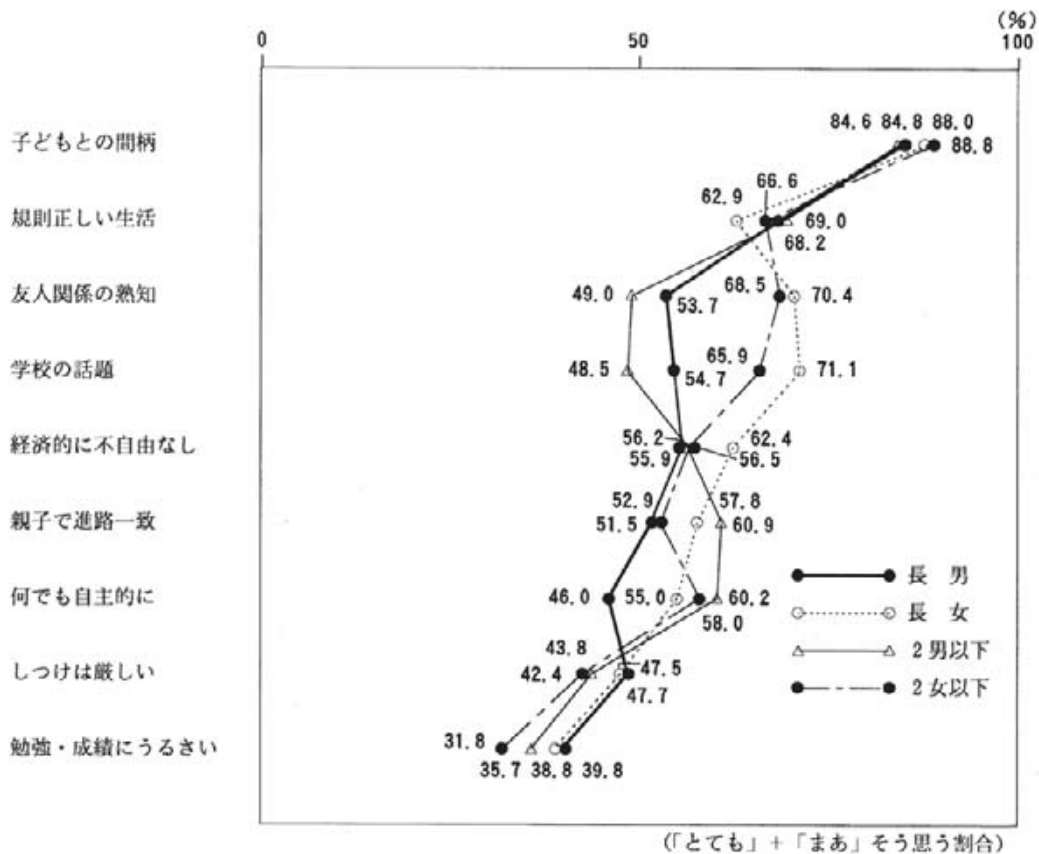
を親の年齢、職業との関係でみたものである。ただし、ここでいう親の年齢は、アンケートへの回答者自身の年齢である。

年齢別では、50代の高年齢層の親ほど、しつけや勉強・成績面ではうるさいが、子どもとの関係や経済面では満足のかかわり方を示している。一方、30代後半の、高校生の親としては若い年齢層は、しつけや勉強・成績面ではやはり、かなりうるさいほうではあるが、子どもとの関係は上の世代の親ほどうまくいかず、また卒業後の進路に対する考え方の食い違いが小さいのが特徴である。

学歴と職業には深い関係があるが、父親、母親の職業別でみると、まず自営業の父母は

子どもの自主性を許容する姿勢が、他の職業の親に比べて強いのが目につく。特に母親には、子どもとの関係を総じて肯定的にとらえる傾向が強い。公務員層の父親は、学校関係の父親と並んで、しつけや勉強・成績面でうるさく、学校の話にも関心を寄せている。学校関係の父親の子に、規則正しい生活態度が際立っている(74.7%)のは、親の職業の反映であろうか。母親については、専業主婦層に顕著な傾向がみられる。すなわち、専業主婦層は各項目で比較的親子関係の円満さをみせながら、なおしつけや勉強・成績面では最も強い関与の姿勢を示している(「しつけ」51.0%、「勉強・成績」58.9%)。

図Ⅱ-2 子どもの統柄と家庭生活の評価



表Ⅱ-5 親の年齢・職業別の家庭生活の評価

(%)

	年 齢				父 親 の 職 業			母 親 の 仕 事				
	36 ~40歳	41 ~45歳	46 ~50歳	51 ~55歳	自営業	公務員	会社員	学校関係	フルタイム	パートタイム	専業主婦	自営業
子どもとの関係はうまくいっている	84.9 <	86.5 <	88.3 <	(91.5)	87.3	85.6	86.5	89.9	84.9 <	86.9 <	88.4 <	(90.3)
子どもは規則正しい生活をしている	64.1	67.5	65.5	60.6	62.7	65.4	67.9	(74.7)	64.2	66.9	(72.6)	63.6
子どもとの友人関係はよく知っている	58.2 <	62.3	62.0 <	(67.6)	60.6	64.2	62.2	65.9	59.0	63.4	62.9 <	(67.1)
子どもと学校のことをよく話す	61.8	60.3	(64.2)	62.0	61.4	(66.6)	59.0	65.9	59.3	58.7 <	(65.4)	(67.6)
子どもには経済的に不自由はさせなかった	53.2 <	58.2	58.1 <	(62.0)	59.0	(65.2)	57.0	58.2	55.1	54.9 <	62.1	(63.7)
子どもの卒業後の進路は親子で話し合わない	(59.0)	54.4	56.3	57.8	56.5	59.5	53.6	59.5	54.5	53.8	56.2 <	(60.5)
子どもには何でも自主的にやらせてきた	53.3	53.8 <	57.5	57.8	(57.3)	55.7	54.7 >	48.1	(60.1)	51.2	51.1	59.3
子どものしつけは厳しくしてきた	(51.9)	43.4	44.5	(53.5)	46.7	46.6	44.1	46.9	39.6 <	47.7 <	(51.0)	46.5
子どもの勉強や成績にはうるさいほうだ	42.5 >	35.3 >	32.5	(46.5)	32.8	(45.5)	34.5	43.0	34.0	36.3 <	(58.9)	36.1

(「とても」+「まあ」そう思う割合)  
 ○ は最大値  
 ● は注目すべき準最大値

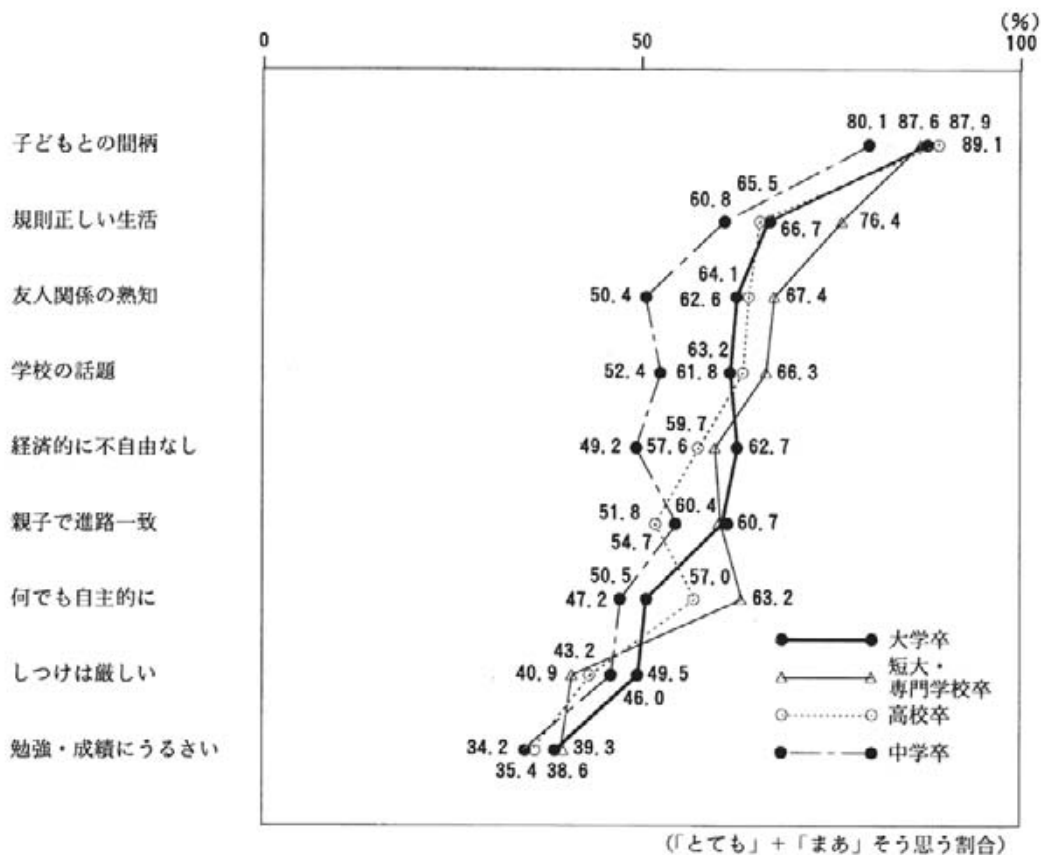
図Ⅱ-3、図Ⅱ-4は父親と母親の学歴別で家庭生活の評価をみたものだが、父親、母親に共通して親子の協調関係をより強くみせているのが、短大・専門学校卒の親である。次に大卒層についてもそうした傾向があり、中卒層と比較すると、明らかに高学歴層ほど家庭における親子関係の円満なスタイルがみえる。個別の項目に注目すると、母親の学歴が低くなるほど、子どもの自主性を許容する構えをみせており、逆にしつけや勉強・成績にうるさいのは、高学歴層の父親・母親ということになる（「しつけ」大、短・専卒母親48%>高卒45%>中卒36%、「勉強・成績」

大卒母親48%>短・専、高卒36%>中卒22%）。

### (3) 高校生に対する親の構え ——自立型か庇護型か

高校生が育ってきた家庭や親のもつ、こうした社会的背景の違いが、子育てのスタイルを社会的に構造化してくるとすれば、子育てに対する親の基本的な構えは、高校生の自立的な生き方にどのような枠づけを与えてくるのであろうか。少なくとも子どもと接する親の構えが、子どもを介して学校に対する基本的なスタンスのとり方につながるということはいえよう。

図Ⅱ-3 父親の学歴と家庭生活の評価

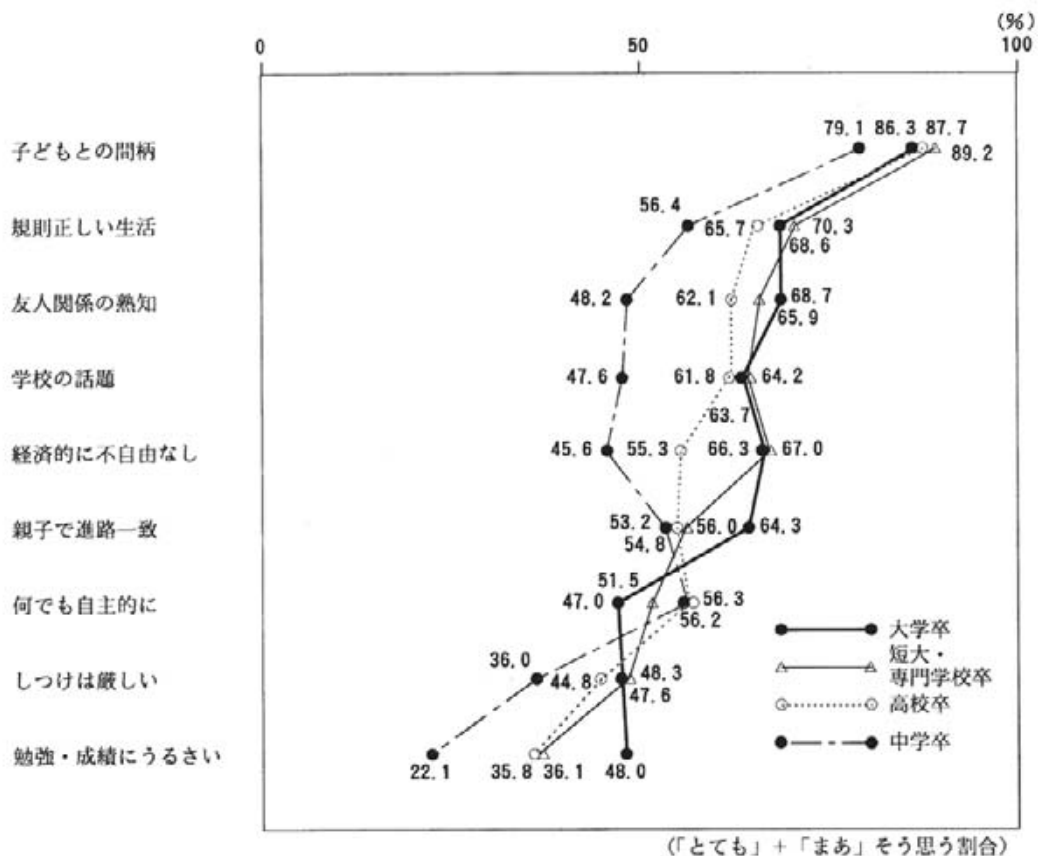


図Ⅱ-5は、自立過程を迎えた高校生に対する親の基本的な構えをたずねた結果であり、さらにそれを、子育てのスタイルにかかわる家庭項目とクロスした結果を図示したのが、図Ⅱ-6である。

まず、高校生に対する親の構えとして、次のような相対する2項目を示し、「近いほうだと思う」項目を選んでもらった。その結果は、「高校生になれば、何でも1人でできるようにやらせたい」と答えた自立型の親は82.4%、一方「高校生といっても、親から見るとまだまだ目をはなせない」と答えた庇護型の親は37.6%であった。そこで、こうした6割の自立型志向の親と、約4割の庇護型志向

の親が、それぞれの家庭において、実際にどのような子育てのスタイルをとっているかをみた。家庭項目の「とてもそう思う」と「まあそう思う」と答えた親を合わせて、自立型と庇護型を比べてみる。この図からいえることをまとめると、自立型は子どもに協調的で子どもの自主性を尊重し、子どももそれに応え、進路についての考えは親子で一致している。すなわち、子ども任せの感はあるが、その反面信頼もある、子ども本位型といえよう。逆に、庇護型は、子どもに経済的に不自由な思いはさせてこなかったが、その反面しつけには厳しく、勉強や成績面でうるさい、どちらかというと厳しい指導型である。

図Ⅱ-4 母親の学歴と家庭生活の評価



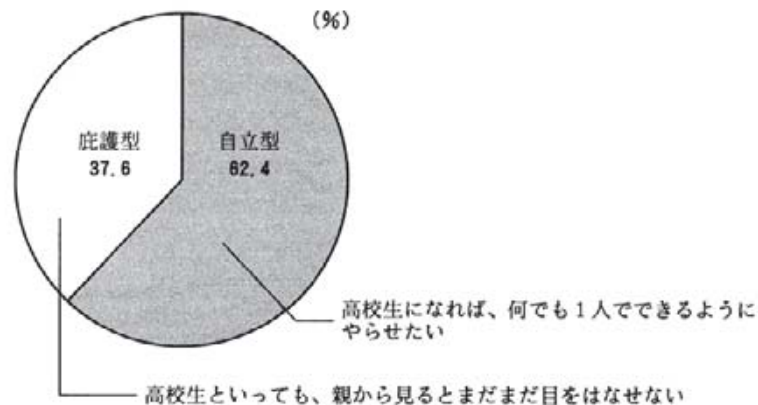
そこで現実には、家庭において「子どもの教育の進め方を決めてきたのは」、主に父親、母親のどちらかをたずねてみた結果が、図Ⅱ-7である。

「父と母の話し合い」と答えた親が35.3%、「ほとんど本人任せ」と答えた親が32.8%というように、2極分化の傾向がある。これをさらに、親のタイプとの関係でみたのが表Ⅱ-6である。自立型は、やはり「本人任せ」が多く34.4%（>庇護型29.9%）であるが、「父」「母」「父母の話し合い」タイプの家庭は、総じて庇護型のほうが多くなっているのが明らかになった。

さて、これまで家庭での親子関係を軸に子

育てのスタイルをみてきた。ひとまずそれを素描すれば、まず、活発な女子高校生に対し、まじめでおとなしい男子高校生が印象づけられる。そして、親と子には問題を感じさせないほどスムーズな親子関係ができています。それは、子どもが、学校で成績がよいこと、また、親が学校に満足感をより強くもつことに裏づけられている。子育てのスタイルは、ある程度は親自身の年齢、職業、学歴などの社会的要因によって異なる。しかし、高校生に対する親の基本的構えによっても、自立型の親ほど家庭でも子ども本位に、また庇護型の親ほど厳しい指導型が特徴づけられるのである。

図Ⅱ-5 親の考える高校生への構え



図Ⅱ-6 家庭生活の評価 × 親の構え





図Ⅱ－７ 子どもの家庭教育の決定タイプ

				(%)
父と母の話し合い	ほとんど本人任せ	母親が強い	父親が強い	
35.3	32.8	20.6	9.5	その他 1.8

表Ⅱ－６ 家庭教育の決定タイプと親の構え

	親の構え	
	自立型	庇護型
父親が強い	9.3	10.0
母親が強い	20.3	21.2
父と母の話し合い	34.3	37.2
本人任せ	34.4	29.9

## 2. 子育ての達成感

次に、親として、わが子を地元の進学名門校に入学させることができた、これまでの子育ての仕方についてどのように捉えているのか、子育ての評価的側面についてみてみたい。

表Ⅱ-7は、わが子の子育てについて5つの側面から、うまくいったかどうかをたずね、さらに全体としての子育ての評価をまとめたものである。

まず、子育て全体からみると、「とてもうまくいった」と「かなりうまくいった」と答えた親を合わせると、6割以上の親がほぼうまくいったとみている。これは、「うまくいっていない」と答えた親が、わずか5%にすぎないことを考えると、親たちの子育てに対する成功感の強さがうかがえる。個別の側

面で見ると、「健康」や「人への思いやり」の面は、「うまくいった」と答えた親がほぼ7割前後に達しているが、「学力」や「しつけ」の面については、半数そこそこの親しか成功感をもっていない。「やる気」にいたっては半数以下となっている。

親のこのような子育て感は、家庭における子どものきょうだい関係の特質もさることながら、学校教育優勢の今日、学業成績の良し悪しが関係していることは十分に予想できる。

まず、図Ⅱ-8から子どもの性別で見ると男子には「しつけ」の面が、女子には「やる気」の面が相対的に評価されているが、学力の面では特に有意な差はみられない。しかしこれを学業成績別にみると、ほとんどすべて

表Ⅱ-7 子育て感

	(%)				
	とても うまく育った	かなり うまく育った	どちらとも いえない	あまりうまく 育っていない	全然うまく 育っていない
全体として	7.4	54.8	32.8	4.8	0.2
	62.2			5.0	
健康の面で	23.6	54.8	16.0	5.4	0.2
	78.4			5.6	
人への思いやりの面で	17.1	48.7	27.8	5.5	0.9
	65.8			6.4	
学力の面で	7.2	45.4	36.6	9.5	1.3
	52.6			10.8	
しつけの面で	8.3	41.2	38.7	10.3	1.5
	49.5			11.8	
やる気(バイタリティー)の面で	9.6	37.3	38.4	13.0	1.7
	46.9			14.7	

[あなたから見て、お子さんの次のような面は、これまでのところ思いどおりに育っていると思われ  
ますか。]

の面で、成績が上位にある子どもほど親は子育てがうまくいったと答えている（表Ⅱ-8）。

そこで今度は、子育てをしてきた親自身の性別や学校への満足度から、その点をさらにみってみると、図Ⅱ-9にみられる通り、父親は子育て全般に甘い評価がみられるが、母親は厳しい姿勢がうかがえる。とりわけ、学力の面では、子育てが「うまくいった」と答えた父母を比較すると、父親66.0%>母親49.9%というように、子どもの勉強や成績に対する母親の厳しい態度が目される。

また、親の学校満足度とのクロスからは、表Ⅱ-9にみるように、学校にとっても満足している層の親ほど、子育てにも好評価であり満足層の親の子育てに対する自信がうかがえる。

表Ⅱ-10は、「うまくいった」と思われる子育て感と親の年齢、職業、学歴との関係を見た結果である。

全体としては、40代後半以降の世代で、高

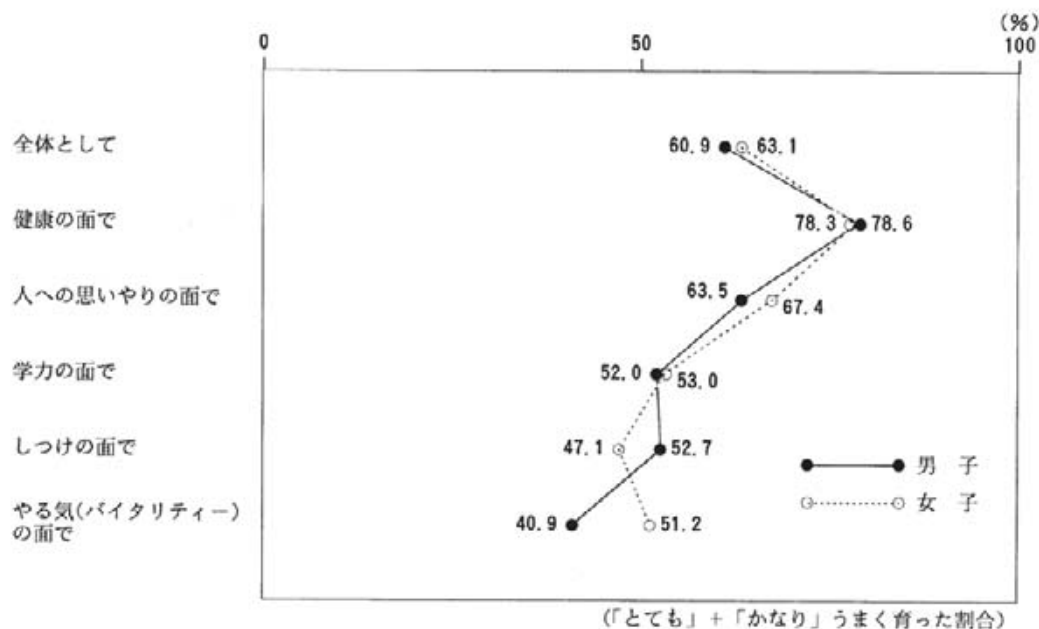
卒・自営業層の父母に子育ての評価が高い。

健康や人への思いやりなど、肉体的・精神的な発達の間では、父親は短大・専門学校卒、大卒、母親は高卒、短大・専門学校卒というように、どちらかという和高学歴層の親に「うまくいった」という評価が多い。職業別では会社員層の父親と、フルタイム・自営業層の母親に顕著である。

一方、学力という知的発達の面では、父母ともに学歴が高くなるにつれて評価は厳しくなっている。職業別では、公務員層の父親、パートタイム・専業主婦層の母親に、学力への低い評価がみられる。このことは、学力に対する評価の基準が高く、それだけこだわりの強さをあらわしているためであろうか。

その反面、しつけに対して専業主婦層は高い評価を与えており、自信のほどをみせつける格好になっている。また、やる気については、学歴の低い親ほど、そして自営業層の父親に高い評価がみられる。

図Ⅱ-8 子どもの性別と子育て感



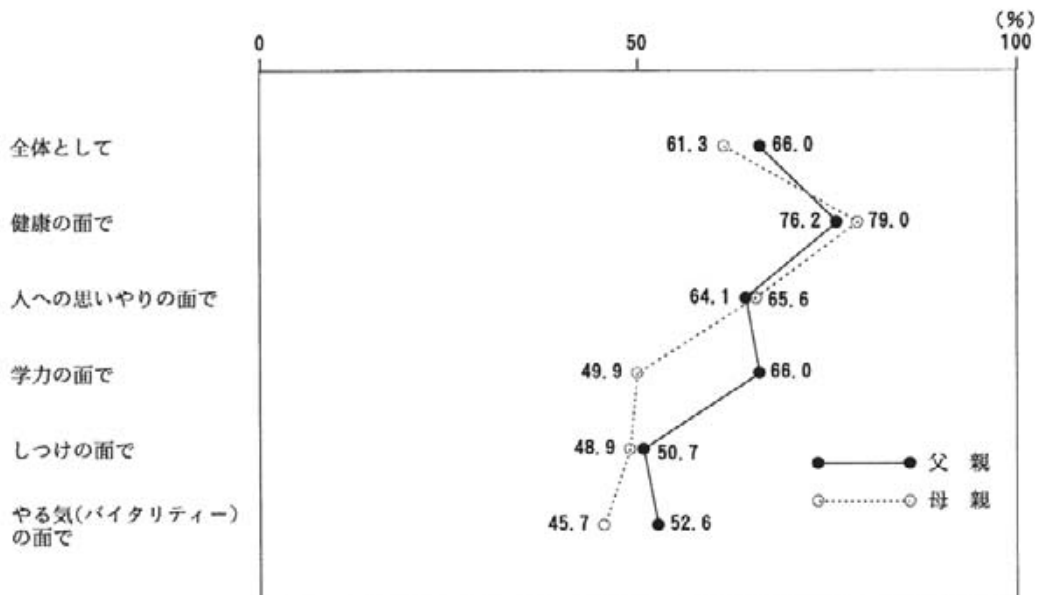
表Ⅱ－８ 子どもの学業成績と子育て感

(%)

	上位	中の上	中位	中の下	下位
全体として	76.7	71.7	59.4	49.8	43.0
健康の面で	83.1	76.5	77.4	78.9	79.0
人への思いやりの面で	67.1	65.8	67.7	67.3	58.2
学力の面で	82.7	69.7	47.4	24.6	18.6
しつけの面で	61.5	53.6	46.8	44.7	35.7
やる気(バイタリティー)の面で	64.9	51.7	46.1	33.2	29.5

(「とても」+「かなり」うまく育った割合)  
○は最大値

図Ⅱ－９ 親の性別と子育て感



(「とても」+「かなり」うまく育った割合)

表Ⅱ－9 親の学校満足度と子育て感

(%)

	とても満足	かなり満足	どちらともいえない	あまり満足していない	全然満足していない
全体として	80.7	65.4	41.3	36.5	12.5
健康の面で	47.9	29.9	21.6	39.7	50.0
人への思いやりの面で	78.6	64.4	58.2	54.0	37.5
学力の面で	72.8	53.9	32.5	28.5	25.0
しつけの面で	75.0	83.8	80.6	71.4	37.5
やる気(バイタリティー)の面で	67.6	45.2	33.7	20.6	25.0

(「とても」+「かなり」うまく育った割合)  
○は最大値

表Ⅱ-10 子育て感 × 親の属性 (年齢・職業・学歴)

	年 齢				父 親 の 職 業				母 親 の 仕 事				父 親 の 学 歴				母 親 の 学 歴						
	36~40歳		41~45歳		46~50歳		51~55歳		自営業	公務員	会社員	学校関係	フルタイムパートタイム	専業主婦	自営業	中卒	高卒	短・専卒	大卒	中卒	高卒	短・専卒	大卒
全体として	56.9	< 61.9	< 65.8	64.8	67.1	> 55.3	63.4	58.2	61.4	59.5	< 66.9	< 67.5	57.9	< 64.6	57.5	63.3	55.6	< 64.7	63.9	52.6			
健康の面で	82.0	> 78.1	78.7	> 73.3	77.4	78.6	79.3	77.2	81.4	> 78.6	78.9	> 74.9	76.9	< 78.0	< 84.3	79.5	72.1	< 79.4	< 79.8	76.5			
人への思いやりの面で	60.4	< 65.3	< 68.3	64.8	65.7	64.1	66.1	60.8	66.2	62.9	67.7	< 70.8	63.2	< 64.2	< 68.2	< 68.3	55.3	< 66.3	< 67.6	68.7			
学力の面で	50.4	53.2	49.4	< 60.6	57.2	> 48.4	51.8	54.4	54.4	51.9	52.2	54.9	60.0	> 53.2	48.4	50.7	55.3	> 53.3	50.5	51.0			
しつけの面で	55.4	> 47.9	50.5	49.3	50.2	50.3	50.2	48.1	47.7	47.6	55.6	53.2	42.1	49.1	43.8	< 53.8	40.7	< 49.7	< 55.0	45.2			
やる気(ハイタリテイー)の面で	46.1	46.4	47.7	46.5	50.0	> 39.9	45.6	45.6	48.5	48.6	43.8	48.4	48.8	> 47.1	> 44.9	46.8	50.6	> 48.9	> 40.5	52.0			

(「とても」+「かなり」うまく育った割合)  
○は最大値

### 3. 子育てと学校期待

これまでみてきた子育てにおける親子関係にしても、また子育ての評価にしても、そこには地元の名門進学校、いわゆる「よい学校」に子どもを通わせている、親の子育てに対する基本的な成功感が感じとれる。しかし、進学校の場合、親も子も高校の「よい学校」への入学を果たしたことがゴールというわけではない。最終のゴールは、あくまでもよりよい上級学校への進学におかれているのである。

今回の親の調査の対象となった、高校2年生が希望する進路に関しては、すでに第1章の表Ⅰ-6に示した。ここではそれを、さらに性別と成績別に分けてみたい(表Ⅱ-11)。

表をみると、成績上位グループ、とりわけ成績最上位層の男子が難関大学への進学を希望していることが明らかである。それでは、地方の進学校から難関大学を目指すような、こうした受験エリートの子にもつ親や家庭の特色は、いったいどのようなものであろうか。

表Ⅱ-12は、子どもの進路希望を親の職業と学歴からみたものである。まず、職業別にみると、受験エリートをかかえる親は、父親は学校関係や公務員などの堅実な職業層に多く、一方母親は圧倒的に専業主婦層が多い。

また、学歴別にみると、父親、母親ともに大卒が最も多く、しかも難関大学への進路希望は、親の学歴の高さに比例して多くなっている。

次に、親の学校満足度との関係でみると(表Ⅱ-13)、難関大学への進学希望層と普通の4年制大学への進学希望層との間には、学校満足度の程度にかなりはっきりした落差がみられる。つまり、難関大学希望層の親は、学校に「とても満足」(26.5%)している人たちが、普通の4年制大学希望層の親は、「かなり満足」か「どちらともいえない」と答えた、必ずしも双手をあげて満足とはいかない親たちが多かった。

そして、そうした家庭において、子どもの教育の進め方を誰が主に決めてきたのかをたずねた家庭教育の決定タイプとの関係でみると、表Ⅱ-14のようになる。これから明らかになる特徴は、家庭のタイプの中で最も多かった父母の協同家庭や母親の考えが強い家庭に、普通の4年制大学希望層が比較的多いのに比べ、難関大学希望層の家庭は、父親の考えが子どもの教育に対し強い影響を与えてきた家庭であるという点である。

表Ⅱ-11 進路希望 × 男女別・成績

(%)

	全 体	性 別		学 業 成 績				
		男子	女子	上位	中の上	中位	中の下	下位
難関大学	14.9	19.4	11.5	34.8	> 18.4	> 9.3	> 4.8	> 3.1
普通の4年制大学	68.1	76.0	62.6	57.1	< 65.6	< 70.2	< 79.0	74.0
短 大	8.3	0.6	13.9	3.4	7.1	11.6	8.1	10.2
専門学校・各種学校	4.1	1.5	6.0	1.7	4.0	4.8	4.8	5.5

○は最大値

ここで気になるのは、激しい進学競争の中で、こうした進学校の生徒の通塾状況である。塾や予備校などの学校外教育機関は、今や全国的な規模で拡大している。隆盛になってきた背景にはいくつかの原因が考えられるが、

親が塾や予備校に大きな期待をもつのは、いずれにしろ学校教育のあり方に対する批判が込められているとみるべきであろう。

図Ⅱ-10は、これまでに子どもを学習塾や予備校（家庭教師を含む）などに通わせたこ

表Ⅱ-12 進路希望 × 親の職業・学歴

(%)

	父親の職業				母親の仕事			
	自営業	公務員	会社員	学校関係	フルタイム	パートタイム	専業主婦	自営業
難関大学	15.0	17.5	13.5	18.8	14.1	11.9	17.9	13.5
普通の4年制大学	68.7	68.1	68.7	67.5	71.6	68.1	65.9	69.9
短大	6.9	8.8	9.9	3.8	5.1	11.9	9.6	6.4
専門学校・各種学校	4.5	3.1	4.2	3.8	3.8	3.9	2.6	7.1

	父親の学歴				母親の学歴			
	中卒	高卒	短・専卒	大卒	中卒	高卒	短・専卒	大卒
難関大学	10.2	13.3	14.8	18.8	14.1	13.9	16.3	19.0
普通の4年制大学	69.5	69.6	62.5	67.3	61.2	69.3	67.3	70.0
短大	5.5	9.0	10.2	7.9	7.1	9.3	8.5	2.0
専門学校・各種学校	3.9	5.1	6.8	2.2	8.2	3.8	3.4	2.0

○は最大値  
●は注目すべき準最大値

表Ⅱ-13 親の学校満足度と進路希望

(%)

	とても満足	かなり満足	どちらとも いえない	あまり満足 していない	全然満足 していない
難関大学	26.5	12.9	7.5	12.9	—
普通の4年制大学	61.9	70.1	71.3	64.5	87.5
短大	7.4	8.6	9.0	9.7	—
専門学校・ 各種学校	2.9	4.5	4.1	3.2	—



とがあるかどうかを、小学校高学年、中学校、高校の3つの教育段階ごとにたずねた結果である。「通わせていた(いる)」を教育段階別にみると、小学校高学年25.2%、中学校72.7%、高校22.3%である。中学校段階で4人に

3人が塾通いを経験しており、飛躍的に通塾率の上昇をみたのは、高校受験に備えたためであろう。一昨年(1992年)、東京と福岡の中学生を対象に実施された調査によると、通塾率は61.3%(男子62.7%、女子60.0%)で

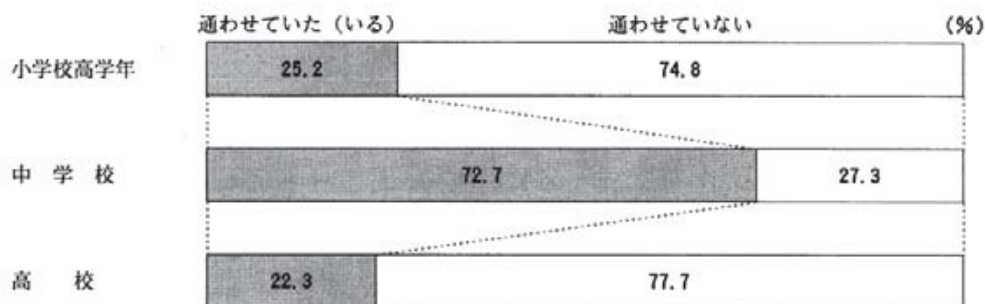
表Ⅱ-14 家庭教育の決定タイプと進路希望

(%)

	父親が強い	母親が強い	父と母の話し合い	本人任せ
難関大学	24.0	14.7	14.0	14.4
普通の4年制大学	62.8	70.2	71.5	64.9
短大	5.8	8.7	8.6	8.7
専門学校・各種学校	2.5	3.0	3.9	5.4

○は最大値  
●は注目すべき準最大値

図Ⅱ-10 学校段階別の通塾・予備校率

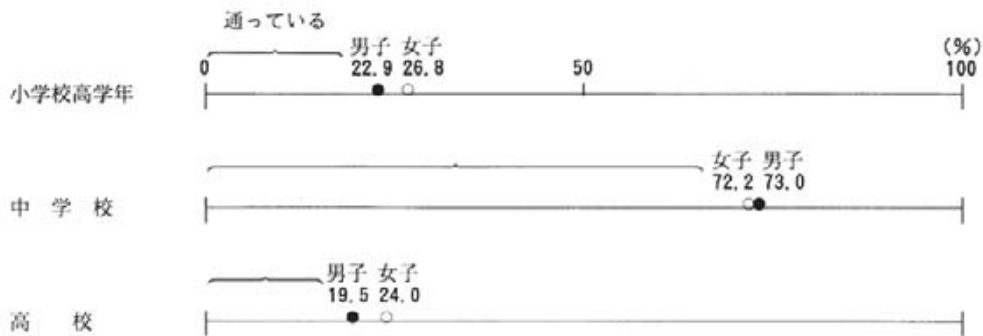


あった（『モノグラフ・中学生の世界』vol. 43  
「疲れている中学生」p. 22）。この数値と比較してみても、今回の進学校に通う生徒の通塾率がかなり高いことがわかる。

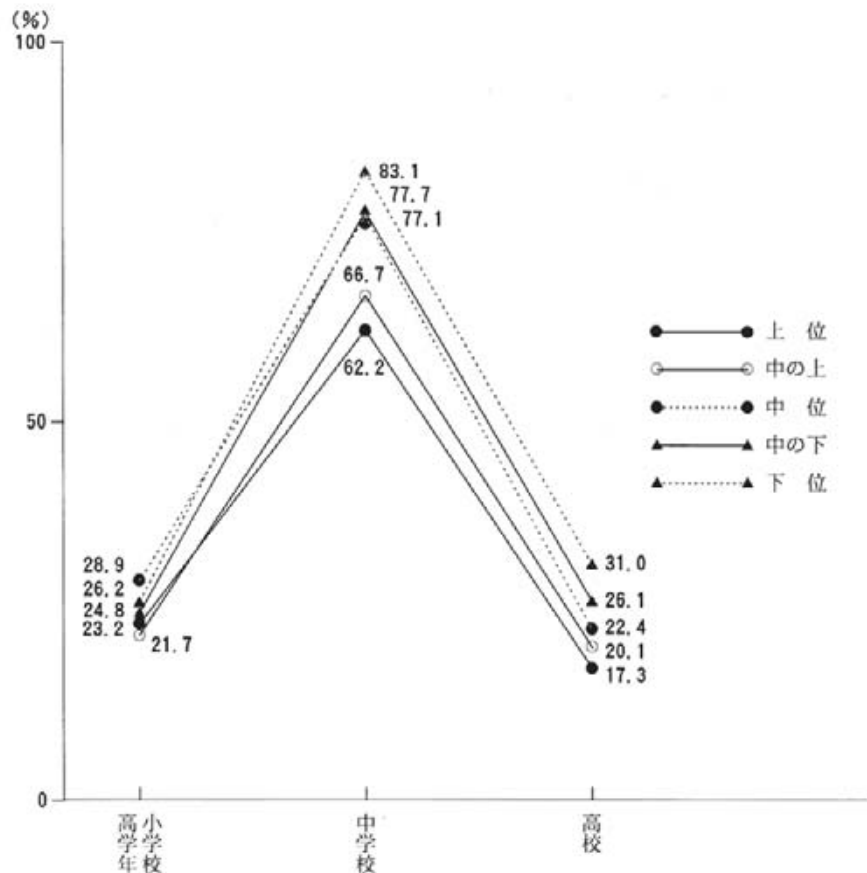
ちなみに、通塾率の性別、成績別の分布は

図Ⅱ-11および図Ⅱ-12の通りで、男子より女子に塾（予備校）通いが目立ち、成績が下位の生徒ほど、こうした学校外教育機関に依存している状況が明らかである。裏を返せば、難関大学を目指すような受験エリートたちは

図Ⅱ-11 性別の通塾・予備校率



図Ⅱ-12 成績別の通塾・予備校率



塾・予備校などにしばられず、受験体制の中でもむしろのびのびと学校生活を送っているのかもしれない。成績下位者ほど受験競争に生き残るための努力を強いられているのが、進学校の現実のようである。

表Ⅱ-15は、通塾状況と親の学校満足度および家庭教育の決定タイプとの関係をみた結果である。親の学校満足度と通塾行動との結びつきは強く、学校に「満足していない」層の親ほど、各教育段階において子どもを塾通いに走らせている様子がみえる。この結果は塾通いが単に受験に向けた学力増進のためというよりは、進学校に入学できた優秀な生徒でも、特に高校の成績下位層にとっては親も子ども学校の教え方についていけなくなっている、あせりにも似た意識を反映しているのではないだろうか。そして、家庭教育の決定タイプ別からは、小学校段階から高校にいたるまで、塾（予備校）への依存の傾向を強く示してきたのは、どちらかという家庭教育が母親中心に行われてきた家庭ということになる。

通塾状況を親の学歴別にみると図Ⅱ-13の通りで、小学校、中学校段階において子どもを塾通いさせてきた親は、父親では高卒層が、

母親では短大・専門学校卒層が多かった。しかし、高校段階になると、父親は高卒層から短大・専門学校卒層へ、母親は短大・専門学校卒層から大卒層へと、学歴の上昇を示している。

最後に、こうした進学校の親たちが、学校に対して寄せる教育期待について、簡単にみておこう。

まず、親は自分の子どもが通っている高校の教育に何を望んでいるのか、6つの項目をあげてたずねてみた。図Ⅱ-14は、「とても」と「かなり」望む層を合わせた親の割合を示している。また、表Ⅱ-16はそのような高校教育の希望層と家庭教育の決定タイプをみたものである。

全体としては、ほとんどの親が「基礎学力の充実」（「とても」＋「かなり」90.3％）をあげており、「体力・精神力の錬成」や「専門知識の教授」をあげる親は比較的少ない。次に、「社会人としての常識」「個性の伸長」「大学入試の勉強」などをあげる親が80％前後で並んでおり、親によって学校への教育期待が「社会性」「個性」「受験学力」といったそれぞれの方向に分化している現状を写している。

表Ⅱ-15 通塾・予備校率 × 親の学校満足度・家庭教育の決定タイプ

	親の学校満足度					家庭教育の決定タイプ			
	とても満足	かなり満足	どちらともいえない	あまり満足していない	全然満足していない	父親が強い	母親が強い	父と母の話し合い	本人任せ
小学校高学年	22.5	24.8	27.5	30.2	50.0	24.4	29.5	25.3	22.2
中学校	67.7	73.1	74.9	79.4	87.5	60.7	77.2	77.3	68.4
高校	19.0	21.0	25.8	35.5	25.0	22.2	25.9	22.6	18.7

○は最大値  
●は注目すべき準最大値

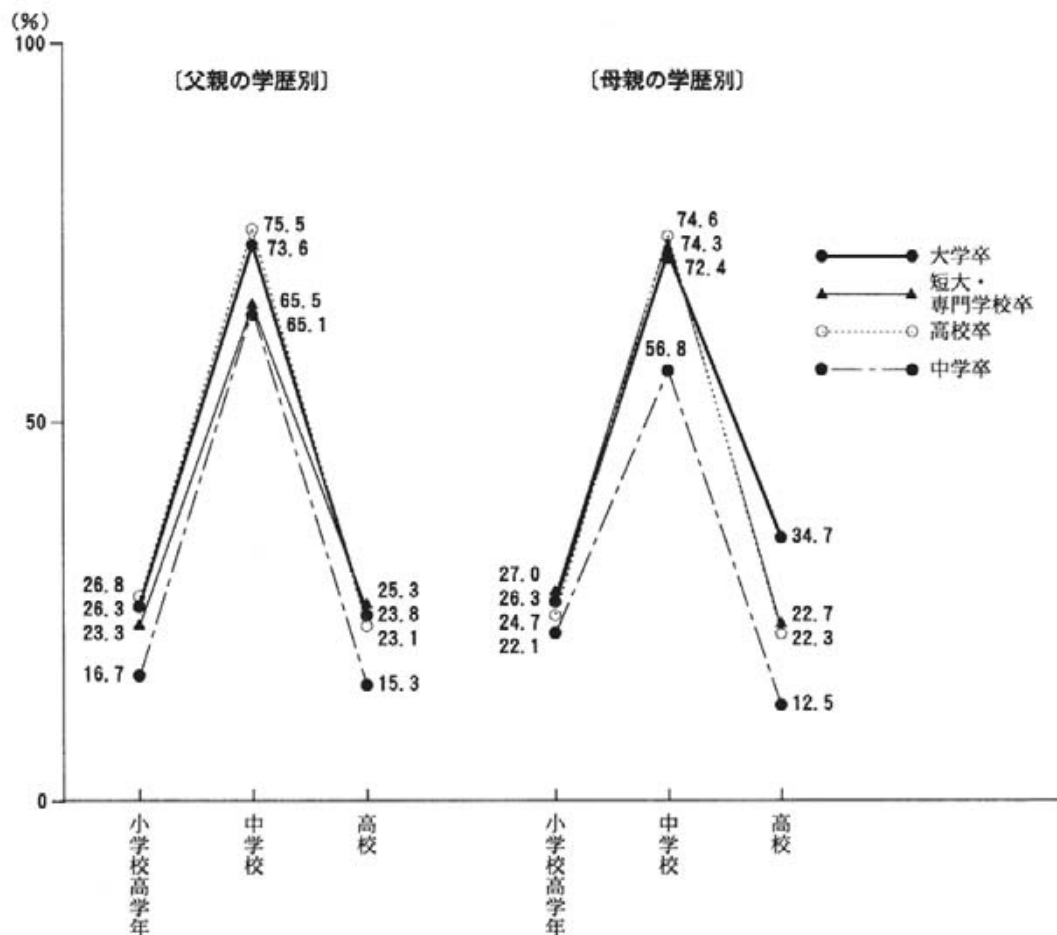
そこで家庭教育の決定タイプとの関係を見ると、父親が強い影響力をもつ家庭の親は、他の家庭タイプの親と比べて、「社会人としての常識」が備わることや高校教育に望む割合が高い。母親の影響が強い家庭の親は、最も強く望む項目として、一方で「基礎学力の充実」(45.1%)をあげつつ、他方では「大学入試の勉強」(34.1%)もあげている。基礎学力と受験の応用学力という、一見するとアンビバレンツな教育要求を高校に求めているのが注目される。回答者の過半を占めていた「父母の協同」家庭や「本人任せ」家庭の親は、ともに「個性の伸長」を求めながら、前者は「大学入試の勉強」に、後者は「専門

知識の教授」に重心が置かれているのが目につく。

ところで、親が学校に対して満足しているかどうかは、親の学校に対する意識の基調を示している。そこで同様の項目と親の学校満足度との関係を表Ⅱ-17に示した。

「とても満足」している親は、「大学入試の勉強」と「体力・精神力の錬成」を強く求め、次の、「かなり満足」している親は、「基礎学力の充実」を求める傾向がみられる。「あまり」「全然」満足していないような親は、「社会人としての常識」「個性の伸長」「専門知識の教授」を期待している。つまり、同じ進学校の親であっても、学校満足度は基礎と応用

図Ⅱ-13 親の学歴別の通塾・予備校率



の程度の差はあれ学力とそれに見合う体力・精神力が備わることを求め、学校不満足層は、個性や社会性などを身につけさせてほしいと考えるように、教育期待の観点に顕著な違いをみせている。

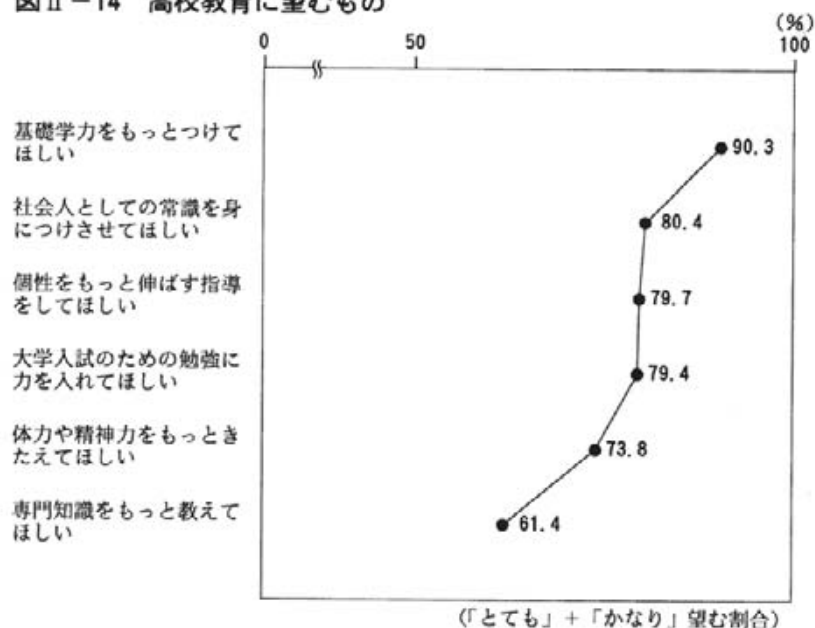
このようにみえてくると、子どもへの理解と配慮の行きとどいた進学校の親たちの教育熱心さは、子どもの学業成績のよさに支えられた子育ての成功感と一体になったものであることがわかる。小さいときからの激しい受験競争の中で、子どもの教育達成の可能性が学校への満足度の尺度となり、いっそうの受験学力の増強を求めて学校教育への期待感に増

幅される結果となっている。

高学歴社会の中で、こうした地方の進学校の受験エリート型の家庭は、公務員や教員などの高学歴層である。そして、より高い学歴目標に子どもを駆動させているのが、高卒学歴をもつ専業主婦層の母親たちであることも垣間みえた。大学受験を過熱化させる促進力となっている、このような社会層の親たちにとって、学校教育が受験体制のメカニズムに有効に作動する限り、学校への教育期待は合理化され高まっていく。

それでは、親のもつこうした学校期待の中味について、以下の章で具体的に分析・検討したい。

図Ⅱ-14 高校教育に望むもの



表Ⅱ-16 家庭教育の決定タイプと高校教育に望むもの

(%)

	父親が強い	母親が強い	父と母の話し合い	本人任せ
基礎学力をもっとつけてほしい	32.8    56.6 89.4	45.1    45.1 90.2	34.7    56.7 91.4	40.4    48.9 89.3
社会人としての常識を身につけさせてほしい	32.8    50.8 83.6	27.7    47.3 75.0	30.3    51.5 81.8	31.4    49.6 81.0
個性をもっと伸ばす指導をしてほしい	29.5    48.4 77.9	26.9    46.6 73.5	26.6    57.8 84.4	32.0    47.6 79.6
大学入試のための勉強に力を入れてほしい	26.4    45.5 71.9	34.1    44.3 78.4	32.2    51.6 83.8	28.2    49.8 78.0
体力や精神力をもっときたえてほしい	27.0    48.4 75.4	24.2    45.5 69.7	24.1    51.1 75.2	27.7    46.6 74.3
専門知識をもっと教えてほしい	12.4    43.0 55.4	14.8    38.8 53.6	17.5    45.5 63.0	18.5    47.4 65.9

(「とても」+「かなり」望む割合と合計)  
○は最大値

表Ⅱ-17 親の学校満足度と高校教育に望むもの

(%)

	とても満足	かなり満足	どちらとも いえない	あまり満足 していない	全然満足 していない
基礎学力をもっとつけてほしい	87.8	92.2	88.9	90.5	71.5
社会人としての常識を身につけさせてほしい	79.3	81.0	79.2	81.0	100.0
個性をもっと伸ばす指導をしてほしい	81.7	78.9	78.4	85.7	85.8
大学入試のための勉強に力を入れてほしい	86.2	79.9	72.0	74.6	71.5
体力や精神力をもっときたえてほしい	75.7	73.2	73.7	71.4	71.5
専門知識をもっと教えてほしい	64.7	60.7	56.8	69.9	71.5

○は最大値  
●は注目すべき準最大値